

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年 7 月 12 日

派遣者氏名（専門分野）	範 玉梅 （日本語教育学）
-------------	---------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	教師教育における多文化教育アプローチの調査
-------	-----------------------

派遣期間

2011年 1月 16 日 ～ 2011年 4月 15 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	米国	ロサンゼルス	カリフォルニア州立大学ロング ビーチ校教育学部	Professor Xin Li

派遣先で実施した研究内容

今回の研究テーマは多文化教師教育の実践に関するものである。在日外国人の数が急増しはじめた 1980 年代の後半以来、日本語教育関係者の間で「多文化共生」という言葉を聞くことが非常に多くなってきた。多文化共生という新たなパラダイムに基づく日本語教育の実現には、教師への多文化教育が必要なはずだが、それについて体系的な研究や目立った実践はいまだ見受けられない。そこで、今回の調査では多文化教育実践者の一人であるカリフォルニア州立大学ロングビーチ校 Li Xin 教授の授業参与観察、Li 教授や学生たちと話し合いを行うことによって、Li 教授の多文化教育実践の実態を明らかにし、そこから、日本の日本語教師教育の実践へのヒントを探ることが目的であった。以上の目的を達成するため、申請者はカリフォルニア州立大学教育学部において、以下の研究活動を行った。

- ① Li 教授の授業を参与観察し、授業運営の仕方及び特徴を記録
(毎週月曜日と水曜日の教師教育学の講座に参加)
- ② Li 教授、及び彼女の授業の受講生へのインタビュー
- ③ 授業の配布物や学生の提出物など資料収集 (授業のフィードバック、読書リスト)
- ④ 毎週月曜日及び水曜日の教育学研究科の教授会に参加 (この参加により、大学における教員たちの環境、考え、問題、研究など多くのことがわかった)
- ⑤ 2011年 2月 28 日、教育学研究科の院生たちを対象に大阪大学の日本語教師教育について発表 (質問や意見交換を通して、日本の教師教育とアメリカの教師教育における実践上の相違点が明らかになった。)

裏面に続く

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の研究課題は教師教育における多文化教育アプローチの調査である。派遣先であるカリフォルニア州立大学ロングビーチ校のあるアメリカは歴史的に人種的対立がさまざまな形で存在している国であり、その中でもカリフォルニア州は移民が非常に多い土地で、新たな文化差も生まれている。このような社会的背景ゆえ、教師教育における多文化教育の重要性は広く認識されている。そうした中で当該大学では、教師教育のカリキュラムの中に多文化教育を正式に取り入れている。ここで本調査で当該大学の多文化教育に関して明きからになった点を2点述べたい。

① 大学システムにおける多文化教育の取り組み

当該大学におけるシステム上の多文化教育の特徴の一つは、積極的に文化背景の違う教員及び学生を受け入れるところにあると言えよう。当該大学の教員たちは世界各地から来ており、アメリカ出身者は全体の三分の一ぐらいしかいない。また、大学側は教育のグローバル化を図るため、計画的に留学生を大量に受け入れている。現在、当該大学に在籍する留学生数がアメリカ西海岸で一位であり、ユニークな教育が行われていることがこれまでに度々報道され、全米に知られるようになった。それと同時に、当該大学では、国際交流プログラムも積極的に取り組み、国際交流活動を盛んに行う一方で、在籍する留学生に対する管理システム及び言語学習の指導も重要な一部として学校システム上に組み込まれている。このようなことから、当該大学では、学外、また異文化から主体的に学ぼうとする開かれた大学であることがよくわかる。その代表的な例として、短期プログラムの研究者にも教授会への参加及びプレゼンテーションの実施が義務づけられていることが挙げられる。毎週行われる教育学部の教授会は、時間の節約とリラックスした環境づくりも考慮され、教授たちは教育学部の提供した昼食を取りながら、会議を行う。会議は、毎回学外からの研究者の簡潔なプレゼンテーションから始まり、学外の研究者がいるにも関わらず、研究のことだけでなく、教員待遇対策に関する議論や教員組合の取り組む活動などが行われ、解放的な雰囲気が漂う。このような活動に参加することより、教育学部の教育システムや教師教育にかかわる研究者たちを取り巻く環境などについてもより深く理解できるようになったと言える。特に教授たちの友好的な態度、異文化への尊重、及び探求心の強さは現場に行かないかぎり、感じられないであろう。

② ナラティブ型教師教育実践

Li 教授の授業の全貌を明らかにすることが今回研究調査の主な目的である。今回参加したのは、Li 教授の2011年前学期の講座である。講座は指定図書である『Action Research for Teachers: Traveling the Yellow Brick Road』(2009)を使い、「How to do act research?」をめぐって行われるが(講座参考書籍に関しては参考文献を参照されたい)。受講生が自身が携わる教育現場で気づいた問題を研究の手順を踏みながら解決していくことが目的である。週二回の講座は研究方法の実践と文献講読の二つに分けられ、教授二人が共同で担当する。講座では、現場教育者である受講生は、他者との調和的な会話を進めるのに、どのように聞き取ればよいのか、他者との対話の仕方、どのように反省的に相手の話を受け取るのかというような他者への理解を深めるための実践や議論が行われていた。一言で受講生が教育に携わっていると言っても、教える内容もそれぞれ異なっているし、教育対象が小学生から大学生までと幅があり、受講生の肌の色、年齢(25歳~60歳)、文化背景も差異が大きいことがこの講座の特徴の一つとなっている。この講座のデザインでユニークなところと言えば、この差異の大きさをグループ活動などに利用することによって豊かな他者(受講者から引き出された様々な実践知を受講者に提供すること)への提供に変え、受講生の学ぶ心を育てているところにある。受講生の差異を生かすところにLi教授の工夫があり、それに対する筆者の理解は実際の授業に参加したことで深まったと言える。また、事情により大学に来られない場合でも、インターネットを通じて講座に参加しようとした受講生の存在から、講座で繰り広げられる議論への関与度の高さが伺えた。さらに、授業を安心して語るができる場として確保することはナラティブ型の教育実践で非常に重要だということがよくわかった。安心して語るができる場を作るには、教育実践を行う指導者自身の寛容度も自己開示も大切だと思われる。その度合いの把握が難しいが、「学ぶ心」を持つことがその基本となるのではないかとLi教授はインタビューや日頃の話し合いを通して教えてくれた。

上述のように、多文化教師教育講座では、あらゆる学生たちの差異を有効に利用できるのかがキーポイントとなっている。つまり、豊かな他者の提供が多文化教育の基本だと言え、他者への理解を深めるには、他

者との対等な関係作りから始まるが、「学ぶ心」を持たずには成しえない。Li 教授の教育実践はこのような認識の下で行われ、学ぶ心を育てることに力を入れている。それに関わる指導者も自分の存在を一人の他者として意識し、自分の体験を多文化教育に生かし、受講生と学びあう関係を保つようにしている。当然、一つの教育実践は、社会の認識、大学側の考え方、同僚や受講生たちの協力などと密接にかかわっている。当該大学における多文化教育の取り組みからは、多文化教師教育を考える場合にも教室内だけではなく、教師を取り巻く環境づくりにも注目すべきであることが示唆される。当該大学は多文化教育の取り組みに対する積極的な姿勢が、Li 教授の教育実践の強い支えともなっていると考えられるのではないかと思う。

参考文献：

- 1.Holly,M.L.,Arhar,J.M.,Kasten,W.C.(2009).(3rdEdition)Action Research for Teachers: Traveling the Yellow Brick Road. Boston:Allyn & Bacon
- 2.Barone,T.& Eisner,E.(2006).Aarts-based educationl research.In Green,J.L.,Camilli,G.,& Elmore,P.B.(Eds.) Handbook of complementary methods in education research(2nd ed.)(pp 95-110).Mahwah,New Jersey:Lawrence Erlbaum.
- 3.Connelly,E.M.& Clandinin,D.J.(2006).Narrative Inquiry. In Green,J.L.,Camilli,G.,& Elmore,P.B.(Eds.) Handbook of complementary methods in education research(2nd ed.) (pp 477-487). Mahwah,New Jersey:Lawrence Erlbaum.
- 4.Pan,L.M.,(2008).Preparing literature reviews: Qualitative and Quantitative approaches.Third Ed.Glendale,CA:Pyrczak Publishing

派遣後の研究発表の予定

1. 2011 年度世界日本語教育大会 (2011 年 7 月 19 日～7 月 21 日) 於中国天津大学
口頭発表 「日本語学校の学びの再生を考える」